

離婚と再婚の実態に関する調査結果

——離婚のみ経験者と再婚経験者の比較を中心に——

A Comparative Study of Reasons for Considering Divorce among Divorced and Remarried Persons: Based on the Results of a Survey of the Actual Conditions of Divorce and Remarriage

野口 康彦/青木 聡/直原 康光

要旨

本稿の目的は、インターネットリサーチ会社に委託して実施した離婚・再婚の実態に関する調査の結果を踏まえつつ、離婚のみ経験者と再婚経験者の結婚の捉え方・結婚観や離婚を考えた理由等に関する自由記述回答を質的な分析方法を用いて検証し、両群の比較検討を行った。また、離婚、あるいは再婚のメリットとデメリット、そして再婚を考えた理由についても、主として男女の差異を中心に考察を行った。離婚のみ経験者は、過去の結婚生活にかかわる傷つきや喪失体験を十分に消化できない一方で、再婚経験者は、自身の離婚体験に対して、ある一定の終止符をうてたことにより、離婚の経験を生かすことで、再婚に踏み切れたのではないかという仮説を提示した。また、金銭問題にかかわるトラブルや暴力など、離婚に伴うトラウマ的な体験としては、男性よりも女性の方が被害に遭いやすい可能性が示唆された。

1. 問題と目的

厚生労働省（2023）の「令和4年（2022）人口動態統計月報年計（概数）」によれば、2022（令和4）年の日本における婚姻件数は50万4878組で、前年の50万1138組より3740組増加した。平均初婚年齢は夫31.1歳で前年の31.0歳より上昇しており、妻は29.7歳で前年の29.5歳より、やはり上回っている。また、離婚件数は17万9096組で、前年の18万4384組より5288組減少している。さらに、厚生労働省（2022）の「令和4年度 離婚に関する統計の概況」によれば、離婚の種類別にみた離婚の年次推移として、令和2年における協議離婚は、88.3%であった。協議離婚以外の離婚を種類別にみると、調停離婚は近年低下する一方で、審判離婚は近年上昇し、

2004（平成16）年からできた「和解離婚」は2016（平成28）年以降、1.3~1.6%で推移している。

法務省（2021）は、父母の離婚後の子の養育の在り方を含む家族法制に関連し、協議離婚の実態を把握することを目的として、協議離婚制度に関する実態についての調査研究（委託）を報告している。協議離婚後に監護親となった者及び監護親とならなかった者について各500名（合計1000名）を有効回答者とし、61の本調査の項目からなるこの調査では、離婚時の家族構成や生活状況、離婚の原因、そして離婚後の養育費や面会交流の取り決めなど、質問は多岐にわたっている。また、曾山（2019）は、離婚を経験した当事者がアクセスしたインターネット上の掲示板の分析を通して、離婚についての意識や困

ていること、心配事項などを探索した。このような調査にみるように、離婚を経験した当事者たちが離婚時に置かれた生活環境や心理的な状況、そしてどのような支援を求めているのかを明らかにしていくことも、親の側に限らず、親の離婚あるいは再婚を経験した子どもの養育に関する制度・政策を検討するうえでも重要であろう。ただし、離婚手続きのおよそ9割を占める協議離婚において、離婚あるいは再婚を考えた理由等に関する調査結果を見ることは非常に少ない。

よって、本稿では、インターネットリサーチ会社に委託して実施した離婚・再婚の実態に関する調査の結果を踏まえつつ、離婚のみ経験者と再婚経験者の結婚の捉え方・結婚観や離婚を考えた理由等に関する自由記述回答を質的な分析方法を用いて検証し、両群の比較検討を行った。また、離婚、あるいは再婚のメリットとデメリット、そして再婚を考えた理由についても、主として男女の差異を中心に考察を行った。

2. 方法

(1) 調査方法と調査協力者

インターネットリサーチ会社(株)マクロミルに委託し、全国47都道府県の登録モニターにスクリーニング調査を行った後、20歳～69歳までの男女に対して、離婚をして再婚をしていない「離婚のみ経験者」（以後、離婚のみ経験群）と離婚をして再婚をした「再婚経験者」（以後、再婚群）を要件とした本調査を行った。要件に該当して回答があった824名（均等割付：離婚のみ経験群412名、再婚群412名）を分析の対象とした。データの分析対象となったのは、824名であり、男性は388（47.1%）であり、女性は436名（52.9%）であった。図1に調査協力者の年齢（年代）の内訳を示す。45歳から60歳以上で、全体

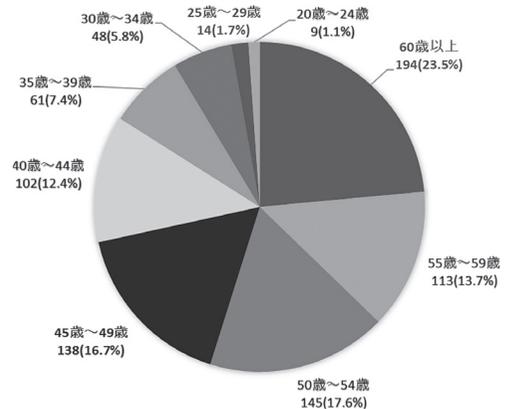


図1 調査協力者の年齢（年代）内訳

の71.5%を占めた。

(2) 調査時期と調査内容

調査は、2020年12月25日（金）～2020年12月27日（日）にかけて行った。調査内容は、「離婚のみ経験群」と「再婚群」とも回答者の基本属性等を尋ねるフェイスシート項目（9項目）は共通とし、それぞれに対して、「離婚の手続きの方法」などについて回答してもらった。さらに、離婚のみ経験群と再婚群共通の質問として「離婚を考えた理由」「あなたにとって結婚とは」の2項目を設け、そして、離婚のみ経験群には「離婚によるメリット」「離婚によるデメリット」、再婚群には「再婚を考えた理由」「再婚によるメリット」「再婚によるデメリット」の項目を設定した。

(3) 倫理的配慮

茨城大学研究倫理委員会の承認を得ている。インターネット調査の実施にあたっては、研究の趣旨に同意した者だけが回答ページに進めるように設定し、途中で回答を中止することは自由とした。なお、本研究について、開示すべき利益相反関連事項はない。

3. 結果

(1) 離婚のみ経験群について

①離婚の手続きの方法

回答者412名のうち、協議離婚が339名(82.3%)で、次いで調停離婚58名(14.1%)、裁判離婚11名(2.7%)、審判離婚4名(1.0%)であった。

②離婚を考えはじめてから実際に離婚届を提出するまでにかかった期間

回答者412名のうち、半年未満と回答した者が217名で全体の52.7%を占めた。図2に離婚を考えはじめてから実際に離婚届を提出するまでにかかった期間を示した。

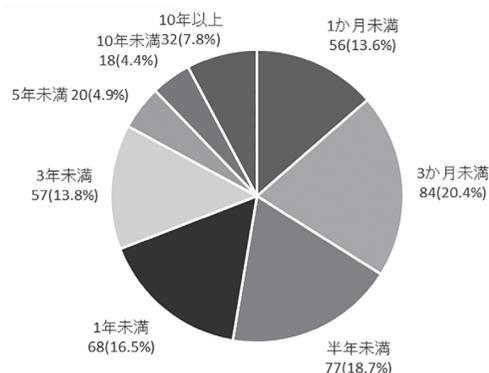


図2 離婚を考えはじめてから実際に離婚届を提出するまでにかかった期間

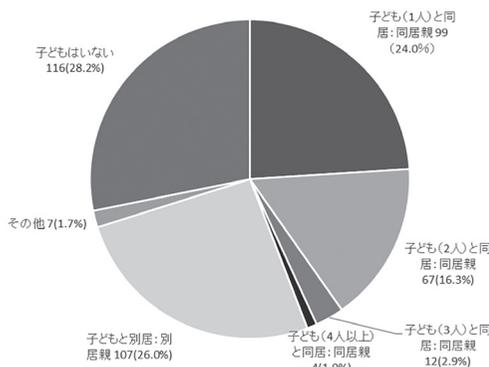


図3 離婚後の子どもとの同居あるいは別居の内訳

③離婚後の子どもとの同居あるいは別居について

回答者412名のうち、子どもと同居している同居親は182名で、全体の44.2%であった。なお、子どもはいないと回答した者は116名(28.2%)であった。図3に離婚後の子どもとの同居あるいは別居の内訳を示した。

④同居している子どもと別居親(元配偶者)との面会交流の実施状況

同居親182名のうち、過去にはあったが現在はないと回答した者が40名(22.0%)で、まったくない71名(39.0%)を合わせると111名となり、全体の61.0%が面会交流の経験はなかった。図4に同居している子どもと別居親(元配偶者)との面会交流の実施状況を示した。

⑤別居親(元配偶者)からの養育費の受け取りの状況

同居親182名のうち、以前も現在も全くもらっていないと回答した者は100名で全体の54.9%になった。なお、養育費の受け取りの金額については30名の回答があり、平均金額は55,500円であった。図5に養育費の受け取りの状況と表1に男女別の回答を示した。

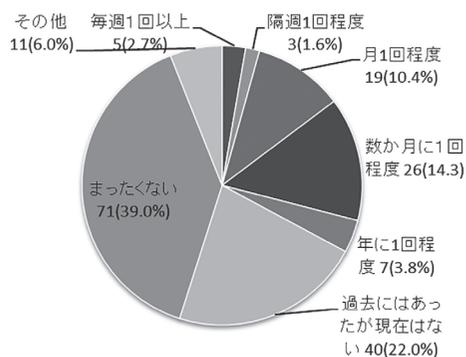


図4 同居している子どもと別居親(元配偶者)との面会交流の実施状況

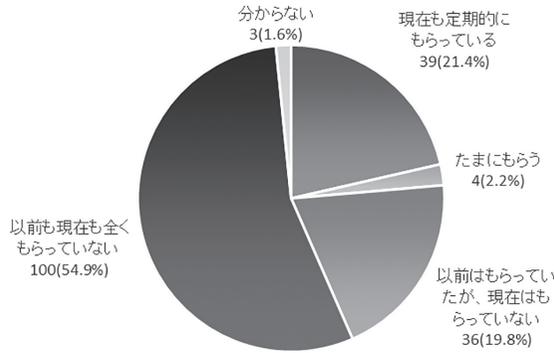


図5 養育費の受け取りの状況

表1 養育費の受け取りの状況（男女別）

	現在も定期的にもらっている	たまにもらう	以前はもらっていたが、現在はもらっていない	以前も現在も全くもらっていない	分からない	合計
男性	0	0	0	23	1	24
女性	39	4	36	77	2	158
合計	39	4	36	100	3	182

(2) 再婚群について

①離婚の手続きの方法

回答者412名のうち、協議離婚は332名(80.6%)であり、次いで調停離婚71名(17.2%)、裁判離婚7名(1.7%)、審判離婚2名(0.5%)であった。

②離婚が成立（前婚解消後）してから、婚姻届（再婚）を提出するまでの期間

回答者412名のうち、1年未満と回答した者が117名(28.5%)となり、全体の4分の1以上を占めた。図6に離婚が成立（前婚解消後）してから、婚姻届（再婚）を提出するまでの期間を示した。

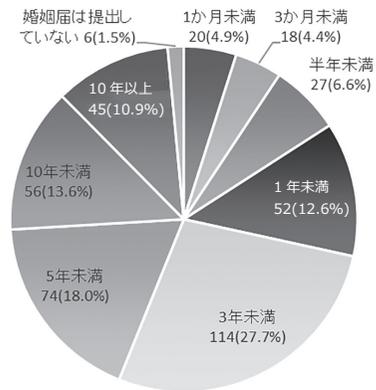


図6 離婚が成立（前婚解消後）してから、婚姻届（再婚）を提出するまでの期間

③再婚時の子どもの状況

回答者412名のうち、少なくとも夫婦のどちらかに子どもがいる再婚経験者は231名(56.2%)であり、全体の半数以上を占めた。

また、夫婦双方に子どもはおらず、夫婦双方ともに再婚経験者であると回答した者は92名(22.3%)であり、全体の約5分の1以上を占めている。図7に再婚時の子どもの状況を示した。

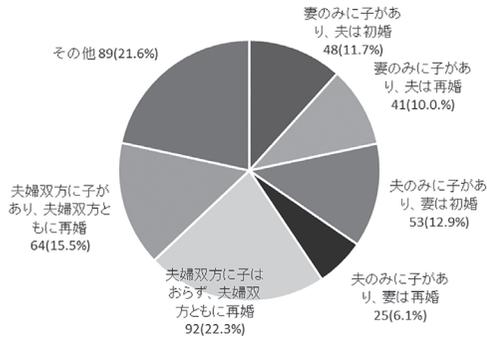


図7 再婚時の子どもの状況

④ 養子縁組の手続きについて

回答者412名のうち、養子縁組をとったと回答した者は70名(30.3%)で、養子縁組をしなかった者は156名(67.5%)であり、その他5名(2.2%)となった。

⑤ 同居している子どもと別居親(元配偶者)との面会交流の実施状況

回答者412名のうち、毎週1回以上から年

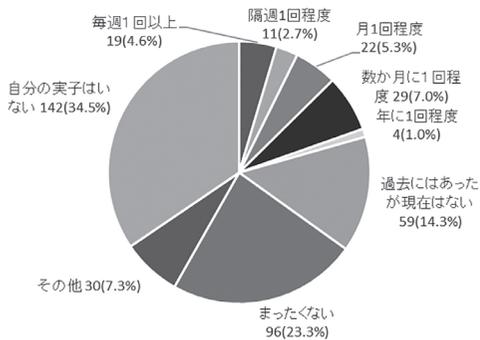


図8 同居している子どもと別居親(元配偶者)との面会交流の実施状況

に1回程度の定期的な交流があると答えた者は、85名であった。実子はいない群の142名を差し引いた270名を分母にすると、31.4%が交流あり群となった。図8に同居している子どもと別居親(元配偶者)との面会交流の実施状況を示した。

⑥ 別居親(元配偶者)からの養育費の受け取りの状況

別居親(元配偶者)からの養育費の受け取りの状況を図9に示した。回答者270名のうち、以前も現在も全くもらっていないと回答した者は157名(58.1%)であり、子どもがいる群全体の6割近くになる。なお、養育費の金額については、29名から回答があり、平均金額は、約50,250円であった。なお、表2には男女別の内訳を示した。

(3) 自由回答記述記述の分析

離婚のみ経験群と再婚群に関する基礎的な

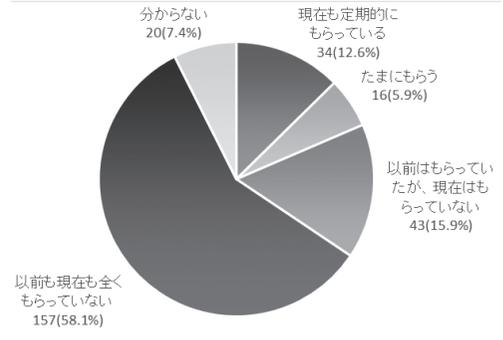


図9 別居親(元配偶者)からの養育費の受け取りの状況

表2 別居親(元配偶者)からの養育費の受け取りの状況(男女別)

	現在も定期的にもらっている	たまにもらう	以前はもらっていたが、現在はもらっていない	以前も現在も全くもらっていない	分らない	合計
男性	19	13	19	91	13	155
女性	15	3	24	66	7	115
合計	34	16	43	157	20	270

情報を提示したうえで、自由回答記述の分析を行った。なお、自由回答記述の分析の手法について、KJ法（川喜田、1967）を援用した。抽出の方法は、Excelファイル上の回答を一つずつコード化し、同じExcelファイルに記入した。次にこれらのコードのうち意味の近いもの同士を集め、小グループに分けた。小グループの意味するところについては、「項目の定義」を設定した。さらに、この小グループを利用して、より抽象度を高めてカテゴリ化を行った。

①離婚のみ経験群の結婚時及び離婚時の平均年齢

表3に離婚のみ経験群の結婚時の平均年齢、そして表4に離婚のみ経験群の離婚時の平均年齢を示した。

表3 離婚のみ経験群の結婚時の平均年齢

結婚時の年齢	平均	人数
男性	32.66	164
女性	27.59	248
合計	29.61	412

表4 離婚のみ経験群の離婚時の平均年齢

離婚時の年齢	平均	人数
男性	41.03	164
女性	36.35	248
合計	38.21	412

②再婚群における再婚時の年齢及び再婚の回数

表5に再婚群の再婚時の平均年齢、そして表6に再婚の回数を示した。

表5 再婚群の再婚時の平均年齢

再婚時の年齢	平均	人数
男性	37.85	224
女性	35.13	188
合計	36.61	412

表6 再婚群の再婚の回数

	1回	2回	3回	4回	合計
男性	198	21	4	1	224
女性	170	16	2	0	188
合計	368	37	6	1	412

③結婚の捉え方・結婚観に関する離婚のみ経験群と再婚群の比較と小考察

表7に、離婚のみ経験群と再婚群に対する「あなたにとって結婚とはなんですか」（以後、結婚の捉え方・結婚観とする）という質問に対する自由回答記述のカテゴリー一覧を示した。表8に離婚のみ群と再婚群と各カテゴリーの比較を示した。離婚のみ経験群と再婚群と各カテゴリーとの比率（割合）の差を見るために χ^2 検定を行ったところ有意であった。（ $\chi^2=170.952$, $df=17$, $p<.001$ ）

この結果と残差を見ると、「②若気の至り、後悔や失敗、我慢、不自由、人生の墓場、しなくてもよい、妥協など」、「③-2わからなさ、不可思議さ、答えの見つからなさ」、「⑤人生経験としての結婚、人生の勉強、結婚生活への意味付け、結婚生活から得られた人生観」については、再婚群よりも離婚のみ経験群の方が多くと解釈することができる。上記以外にも、「世間体、体裁、手続き上の関係など」（離婚のみ経験群：15、再婚群：1）、「夢や理想と現実の違いの実体験」（離婚のみ経験群：7、再婚群：0）など、有意に差があるカテゴリーがみられた。

表7 離婚のみ経験群と再婚群の結婚の捉え方・結婚観のカテゴリー一覧

1. 生活を安定させる、生活を保障する単位、生きていくための手段
2. 安心感や安定感、信頼関係や支え合う関係、感情や体験の分かち合い、補完しあう関係、人間的な成長
3. 人生の転機
4. 生活を豊かにする、人生の充実、楽しみが増える
5. 癒しやエネルギー源、居心地の良さ、居場所としての家族など
6. 若気の至り、後悔や失敗、我慢、不自由、人生の墓場、しなくてもよい、妥協など
7. 家族を作る、家庭を築く、共同生活者、共同作業、家族が増えるなど
8. わからなさ、不可思議さ、答えの見つからなさ
9. よき伴侶やパートナーとの出会い、夫婦の繋がり、共に生きていく姿勢
10. 人生経験としての結婚、人生の勉強、結婚生活への意味付け、結婚生活から得られた人生観
11. 生涯や人生を添い遂げる
12. 社会的な責任
13. 寂しさを埋める、孤独からの逃避
14. 人生の一部あるいは人生、人生の選択肢の一つ、イベント、通過儀礼、人生の象徴など
15. 世間体、体裁、手続き上の関係など
16. 夢や理想と現実の違いの実体験
17. 幸せ、幸せになるための手段
18. 子どもを作る、子孫を残す、子どもの成長を見守る

表8 離婚のみ群と再婚群と各カテゴリーの比較

結婚の捉え方・結婚観	離婚	再婚
① 安心感や安定感、信頼関係や支え合う関係、感情や体験の分かち合い、補完しあう関係、人間的な成長	62	74
② 若気の至り、後悔や失敗、我慢、不自由、人生の墓場、しなくてもよい、妥協など	69	39
③-1 家族を作る、家庭を築く、共同生活者、共同作業、家族が増えるなど	47	51
③-2 わからなさ、不可思議さ、答えの見つからなさ	61	37
⑤ 人生経験としての結婚、人生の勉強、結婚生活への意味付け、結婚生活から得られた人生観	56	0

④離婚のみ経験群と再婚群における離婚を考えた理由のカテゴリー一覧

表9に、自由回答記述の分析から抽出された、離婚のみ経験群と再婚群における離婚を考えた理由に関する27個のカテゴリー一覧

を示した。また、比較をするために、表10に、離婚のみ経験群の離婚を考えた理由上位6項目、そして表11に、再婚群の離婚を考えた理由上位6項目を示した。両群の上位4項目は同じカテゴリーとなった。

表9 離婚のみ経験群と再婚群における離婚を考えた理由のカテゴリー一覧

1. 離婚への相手の希望や要望の受け入れ、あるいは一方的な離婚
2. 配偶者や自身の不貞行為
3. 配偶者以外の重要な他者の存在
4. モラルハラスメントや暴言、暴力を受けた体験
5. 子どもへの虐待、子どもへの悪影響、子どもへの無関心な態度
6. 夫の家事・育児への非協力や関心のなさ、家庭を顧みない態度
7. 夫が仕事をしない、転職が多い、甲斐性のなさなど
8. 借金問題や浪費、金銭感覚の違いなど、金銭・経済にかかわる問題
9. ギャンブルやアルコール飲酒問題
10. 考え方や価値観の相違、性格の不一致など
11. 生活者としての感覚の違い、結婚生活の馴染めなさ、慣れない土地での生活への不適応など
12. 愛されていない、愛情がなくなった、一緒にいるのが嫌になった、一人になりたいなど、共に生活をする意識の消滅に関する要因
13. 会話がなない、会話が成立しないなど、コミュニケーションや対話の不成立
14. 仕事の忙しさや別居生活によるすれ違い、あるいは単身赴任が起因
15. 相互理解のしあえなさ、助け合いや思いやりができないなど、相手への配慮の欠如
16. 相手への信頼感の喪失や不自信
17. 家庭における居場所のなさ、自己の存在の不確かさ
18. 方向性の違いや老後も一緒にいたくないなど、将来を考えたうえでの決断
19. 身体や精神の不調が起因となった夫婦関係の悪化
20. セックスレスなど、性交渉にかかわる問題
21. 相手の親や親族との不仲やトラブルに関する要因
22. 子どもの成人や独立にかかわる要因
23. 相手が自分よりも実親との関係性を優先した
24. その他、忘れた、言いたくない、特にない、など
25. 妻の家事放棄、妻の家出、妻の家庭生活への向かなさ
26. 不妊（再婚群のみ）
27. 宗教上の問題

表10 離婚のみ経験群の離婚を考えた理由上位6項目

離婚のみ経験群	女性	男性	合計
① 考え方や価値観の相違、性格の不一致など	53	34	87
② 配偶者や自身の不貞行為	38	18	56
③ 借金問題や浪費、金銭感覚の違いなど、金銭・経済にかかわる問題	43	9	52
④ モラルハラスメントや暴言、暴力を受けた体験	36	5	41
⑤ 離婚への相手の希望や要望の受け入れ、あるいは一方的な離婚	10	20	30
⑥ 愛されていない、愛情がなくなった、一緒にいるのが嫌になった、一人になりたいなど、ともに生活をする意識の消滅に関する要因	11	11	22

表11 再婚群の離婚を考えた理由上位6項目

再婚群	女性	男性	合計
① 考え方や価値観の相違、性格の不一致など	57	82	139
② 配偶者や自身の不貞行為	36	26	62
③ 借金問題や浪費、金銭感覚の違いなど、金銭・経済にかかわる問題	18	15	33
④ モラルハラスメントや暴言、暴力を受けた体験	25	0	25
⑤ 方向性の違いや老後も一緒にいたくないなど、将来を考えたうえでの決断	6	7	13
⑥ 夫が仕事をしない、転職が多い、甲斐性のなさなど	12	0	12

⑤離婚のみ経験群と再婚群の離婚を考えた理由上位4カテゴリー

男女別の比較をするために、表12に離婚のみ経験群の離婚の理由上位4カテゴリーの男女別の内訳と表13に再婚群の離婚の理由上位4カテゴリーの男女別の内訳を示した。

表12 離婚のみ経験群の離婚の理由上位4カテゴリーの男女別の内訳

離婚のみ経験群男女	女性	男性
① 考え方や価値観の相違、性格の不一致など	59	34
② 配偶者や自身の不貞行為	38	18
③ 借金問題や浪費、金銭感覚の違いなど、金銭・経済にかかわる問題	43	9
④ モラルハラスメントや暴言、暴力を受けた体験	36	5

表13 再婚群の離婚の理由上位4カテゴリーの男女別の内訳

再婚群男女	女性	男性
① 考え方や価値観の相違、性格の不一致など	58	83
② 配偶者や自身の不貞行為	36	26
③ 借金問題や浪費、金銭感覚の違いなど、金銭・経済にかかわる問題	18	16
④ モラルハラスメントや暴言、暴力を受けた体験	25	0

⑥離婚を考えた理由に関する離婚のみ経験群と再婚群の比較と小考察

表14に、離婚のみ経験群と再婚群のカテゴリー数の比較を示した。離婚のみ経験群と再婚群と各カテゴリーとの比率（割合）の差を見るために χ^2 検定を行ったところ有意であった。（ $\chi^2=131.474$ 、 $df=26$ 、 $p<.001$ ）この結果と残差を見ると、「①考え方や価値観の相違、性格の不一致など」のカテゴリーにおいて、離婚のみ経験群よりも再婚群の方が離婚理由として多い（経験している）と解釈することができる。

表14 離婚のみ経験群と再婚群の比較

離婚の理由	離婚	再婚
① 考え方や価値観の相違、性格の不一致など	93	141
② 配偶者や自身の不貞行為	56	62
③ 借金問題や浪費、金銭感覚の違いなど、金銭・経済にかかわる問題	52	34
④ モラルハラスメントや暴言、暴力を受けた体験	41	25

⑦離婚のメリット

離婚のみ経験群412名に回答してもらった離婚のメリットに関する自由回答記述の結果上位10項目を表15に示した。

表15 離婚のメリット

離婚のメリット	女性	男性
① 自由・気楽さ	75	61
② ストレスからの解放、精神的安定	77	23
③ 何もない、なし	16	18
④ 束縛されない、振り回されない、相手の責任を負わずに済む、喧嘩をせずに済む	27	13
⑤ 子どもとの気兼ねのない生活、子どもへの好影響	20	1
⑥ 人生の再出発あるいはリセット、人生や自分らしさの再考	17	3
⑦ お金の使い方を自分で決められる、生活費の軽減	7	9
⑧ (夫の) 金銭問題	14	0
⑨ 姑など相手方の周囲との付き合いをせずに済む	10	2
⑩ 仕事や自分の事に専念できる、自己決定できる	5	2

⑧離婚のデメリット

離婚のみ経験群412名に回答してもらった離婚のデメリットに関する自由回答記述の結果上位10項目を表16に示した。

⑨再婚を考えた理由

表17に再婚を考えた理由（再婚群）のカテゴリー一覧を示した。また、表18に、再婚を考えた理由のカテゴリーの上位5項目（男女別）を示した。

表16 離婚のデメリット

離婚のデメリット	女性	男性
① 経済的な困難、生活の基盤の不安定	104	11
② 特にない・分からない	48	47
③ 助け合う相手がいなくなる、一人の負担が大きくなる	31	17
④ 離婚の子どもへの影響、ひとり親家庭になったことへの子どもへの申し訳なさ、子どもへの罪障感	31	12
⑤ 子どもと自由に会えなくなる、子どもとかかわる機会がなくなる	4	25
⑥ 世間体が気になる、周囲の態度の変化や噂など	16	11
⑦ 寂しさ、孤独感	7	19
⑧ 離婚をめぐる心の傷やストレス、結婚への恐怖感、異性への不信感	15	3
⑨ 父親がいない家庭の不利益や不安	14	0
⑩ 将来や老後の不安、終活問題	6	4

表17 再婚を考えた理由のカテゴリー一覧

1. 新たな人生の再出発や人生の再起、軌道修正
2. 子どものことを考えてくれた、子どもが望んだ、子どもの将来のためなど
3. 経済面への不安、安定した生活や生活の維持、将来に対する不安など
4. 経済面など、老後の不安や終活のため
5. 尊敬できたり、信頼感が持てる、心の支えとして
6. タイミングや時機、縁だと思った、自然の流れでそうなった、結婚したかった、なんとなく
7. 一人の寂しさ、一人の生活のつまらなさ、人生の伴侶と言えるパートナーの希求など
8. 独身生活の不便さ
9. 考え方や価値観が合う、境遇の近さや相性の良さ、人生観が共有できるなど
10. 良い人と出会った、大切な人と思った、好きになった、優しく思いやりがある、一緒に居ると落ち着くなど
11. 子どもが欲しかった、子どもができた
12. 相手からの希望
13. 子どもが成人した、社会人になった、自立した
14. 相手が離婚をしたから
15. 復縁した
16. 家庭が欲しい、家庭が必要
17. 子どもやきょうだいからの勧め、親を安心させるため
18. 特にない、分からない、不明

表18 再婚を考えた理由のカテゴリーの上位5項目（男女別）

再婚を考えた理由	女性	男性
① 良い人と出会った、大切な人と思った、好きになった、優しく思いやりがある、一緒に居ると落ち着くなど	30	27
② 一人の寂しさ、一人の生活のつまらなさ、人生の伴侶と言えるパートナーの希求など	17	29
③ 考え方や価値観が合う、境遇の近さや相性の良さ、人生観が共有できるなど	21	25
④ 経済面への不安、安定した生活や生活の維持、将来に対する不安など	27	10
⑤ 子どもが欲しかった、子どもができた	15	14

⑩再婚のメリット

再婚群412名に回答してもらった再婚のメリットに関する自由記述の結果上位10項目を表19に示した。

⑪再婚のデメリット

再婚群412名に回答してもらった再婚のデメリットに関する自由記述の結果上位10項目を表20に示した。

表19 再婚のメリット上位10項目

カテゴリー名	女性	男性
① 気持ちや精神面の充実・安定	54	73
② なし、初婚も再婚も変わらない	31	64
③ 経済面など生活の安定	52	16
④ 家庭という居場所、新たな家族	12	18
⑤ 離婚経験から得た洞察や学び、自己の客観視	18	8
⑥ 子どもの誕生・子どもとの生活	9	10
⑦ 生活上のリスクの回避、将来や老後の安心感	6	6
⑧ 人生の再スタート	3	7
⑨ 家事など生活の効率化	1	7
⑩ 子どもに父親ができた	7	0

表20 再婚のデメリット上位10項目

カテゴリー名	女性	男性
① なし	71	127
② 自由の喪失・制約や束縛	18	22
③ 子どもがいるかいないかによって生じる状況の差異	26	10
④ パートナーや家族あるいは家族同士の気遣い・世話・気疲れ	18	8
⑤ 財産の分与や相続など金銭をめぐる問題	8	10
⑥ 再婚相手の親や親族との付き合い	14	1
⑦ 世間体、周囲の目	7	7
⑧ 離婚をめぐる手続きの負担	8	2
⑨ 離婚へのハードルの低さ、離婚への怖れ	6	4
⑩ 再婚による自己洞察や過去の結婚生活の反省・振り返り	5	3

4. 考察

離婚のみ経験群と再婚群の自由回答記述の分析により、結婚の捉え方・結婚観、そして離婚を考えた理由について、両群の比較検討をしながら考察を行った。また、離婚のみ経験群の自由回答記述による離婚のメリットとデメリット、さらに、再婚群の再婚を考えた理由、再婚のメリットやデメリットについても、男女の差異を中心に検討を行った。

(1) 結婚の捉え方・結婚観：離婚のみ経験群と再婚群との比較を中心に

「安心感や安定感、信頼関係や支え合う関係、感情や体験の分かち合い、補完しあう関係、人間的な成長」のカテゴリーは、両群ともに最も高い順位となった。さらに、 χ^2 検定の結果、「若気の至り、後悔や失敗、我慢、不自由、人生の墓場、しなくてもよい、妥協など」、「わからなさ、不可思議さ、答えの見つからなさ」、「人生経験としての結婚、人生の勉強、結婚生活への意味付け、結婚生活から得られた人生観」の3つの項目において、再婚群よりも離婚のみ経験群の方が多くと解釈することができた。また、上記以外にも、「世間体、体裁、手続き上の関係など」（離婚のみ経験群：15、再婚群：1）、「夢や理想と現実の違いの実体験」（離婚のみ経験群：7、再婚群：0）など、有意に差があるカテゴリーがみられた。このことから、「離婚のみ経験群」は、過去の結婚生活にかかわる傷つきや喪失体験を十分に消化できない状態が続いており、何らかの肯定的な意味づけをすることによって、自身の人生経験の一部に自身の結婚生活を位置づけようという葛藤が、いまだに継続しているのではないかと考えた。その一方で、再婚群は、かつての離婚体験に対して、ある一定の終止符をうてたことにより、再婚に踏み切れたという仮説が提示できるのではないだろうか。逆説的に考えれば、再婚

群に比べると、離婚のみ経験群は、結婚に価値を見いだしていないという見方もできるだろう。離婚後に再婚を選択する人の中には、離婚の経験を人生の糧としながら、過去の結婚生活を終息させ、承認と安定の欲求を充足させつつ、生活する手段の一つとして、実利的に結婚を捉えているのではないだろうか。

表7に示したように、結婚の捉え方・結婚観として、「生活を安定させる、生活を保障する単位、生きていくための手段」、「幸せ、幸せになるための手段」、「癒しやエネルギー源、居心地の良さ、居場所としての家族など」、「家族を作る、家庭を築く、共同生活者、共同作業、家族が増えるなど」、「寂しさを埋める、孤独からの逃避」、「人生の一部あるいは人生、人生の選択肢の一つ、イベント、通過儀礼、人生の象徴など」、といったカテゴリーが抽出された。

結婚は公的な契約関係とも言えるので、夫婦の立場や関係が社会的に保障されるのは生活上のメリットになることから、夫婦関係は、最小単位の社会保障システムとも言える。「世間体、体裁、手続き上の関係など」、「夢や理想と現実の違いの実体験」のカテゴリーにみるように、親への建前や結婚して家庭を持つことが幸せな人生であるという志向が高い場合は、人生の選択肢において、結婚を優先事項として考える人もいるだろう。また、多くの人は、家族という単位で生活することから、成人期になると家族を形成していくことはごく自然な営みであるという思考を持ちやすく、無意識的に家族文化の世代間伝達が形成されることもあるだろう。「寂しさを埋める、孤独からの逃避」というカテゴリーにみるように、結婚は一人であるという孤独感を避けられるとともに、法律的に「夫婦」と認められることによって、自分の存在が社会的に認められるという欲求が満たされることもある。いわば、承認と安定の欲求を充足する機能も有するだろう。また、恋人関

係のままだと制度的に保障されたつながりは何もないが、結婚をすることにより、法的に夫婦関係が担保され、他人だった相手が「家族」という離れがたい存在に転じる。このような、愛情関係の可視化とも言えるような、客観的事実による結びつきの強さが結婚のプロセスにあるのではないだろうか。生活のための手段や孤独感の解消のためだけであれば、結婚という形式をとらなくても良いが、それでも結婚を選択するのは、法的に保障されたつながりや居場所が欲しいからなのではないかと考える。

Alexy(2020)は、日本でのフィールドワークを通して、夫婦が離婚のリスクを避けようとする、あるいは良好な関係を築こうとする際のポイントの一つに、「つながっていないながらも自立した関係」をあげている。親密な関係でありながらも、過度に相互依存的ではない、個としての自立を尊重し合えるような夫婦の関係性が求められているのかもしれない。

(2) 離婚を考えた理由: 離婚のみ経験群と再婚群の比較を中心に

χ^2 検定の結果、「考え方や価値観の相違、性格の不一致など」のカテゴリーにおいて、離婚のみ経験群よりも再婚群の方が離婚理由として多い(経験している)と解釈することができた。この結果から、考え方や価値観の相違、性格の不一致が原因で離婚を経験した人は、その経験から学び、価値観が合う人との再婚を考えるようになるのではないだろうか。また、「考え方や価値観の相違、性格の不一致など」として、離婚のみ経験群では男性よりも女性の実数が多いが、その一方で、再婚群では、女性よりも男性が多い。男性が再婚を考えるプロセスにおいて、離婚の経験を次の相手との相性を見極める根拠に活用しているのではないかと考える。

再婚群では、「モラルハラスメントや暴言、

暴力を受けた体験」に関する男性の回答が0であった。離婚のみ経験群でも同様の傾向がみられるが、これは、家庭内暴力やハラスメント、あるいは借金の問題など、離婚に伴うトラウマ的な体験として、男性よりも女性の方が被害に遭いやすい可能性を示唆しているのではないだろうか。また、再婚群の女性のカテゴリーに「夫が仕事をしない、転職が多い、甲斐性のなさなど」が抽出された。また、離婚を考えた理由に、子どもの自立を待って離婚に踏み切るという「子どもの成人や独立にかかわる要因」に関する5名の回答があり、離婚のみ経験群2名、再婚群3名で、すべて女性であった。つまり、結婚生活においては、女性の方が経済的な困難に悩まされたり、不利な状況に立たされやすいと言えるのではないだろうか。表16の離婚のデメリットの「経済的な困難、生活の基盤の不安定」については、男性よりも女性の方が圧倒的に多くあげている。結婚する条件として、女性は経済的な要件を重要視するとも言われるが、それは決して金銭自体を最優先しているわけではなく、就労をめぐる環境など、女性が単独で生活をしていくことが難しい日本社会の現実があるからではないだろうか。それゆえ、女性にとって、夫の暴力や金銭問題は、とりわけ重要であるだろう。

「妻が新興宗教にはまった」「妻の実家の宗教」など、離婚のみ経験群において宗教に関する回答が5名(すべて男性の回答)がみられた。結婚は中・長期的な親族との付き合いを前提にすることもあり、相手方の宗教に勧誘をされる、入会を勧められるという事態も想定されるだろう。また、宗教が介在する人間関係については、夫は仕事と家庭に目が向きがちだが、妻の側は実家や親族との付き合いも含む、地域でのコミュニティに関心が向いているのではないかと考えた。

(3) 離婚のメリットとデメリット

自由回答記述の一部を示しながら、離婚のみ経験群による離婚のメリットとデメリットについて、簡潔に述べてみたい。

①離婚のメリット

自由回答記述の一部

○幼稚な人に振り回されずに済む。子どもの世話だけでも大変なのに、大きい赤ちゃんの相手までできないので、離婚したら子供だけに専念できる。煩わしい嫁姑問題から解放される。(途中省略) 今なら相手の逆ギレも親からの反対も押し切れる強さを身につけたけど、当時の自分は本当に弱かった！(途中省略)
「結婚=幸せ」と素直に思える人が羨ましいし、是非とも幸せになって欲しい。私は一人で幸せになります。(笑) 猫がいてくれて、息子も遠くの街で元気に暮らしてて、私も健康で美味しいものが食べられているので幸せです！(46歳女性)

この回答にみるように、離婚のみ経験群の自由回答記述の分析の結果、男女ともに、「自由・気楽さ」が最も多かった。他者に時間を拘束されず、自分のペースや時間を自分で決めることができるなど、離婚によって精神的な自由を得ることができる。2番目に多かったのは「ストレスからの解放、精神的安定」であり、これは女性の方が男性の3倍程度多い結果となった。パートナーとの争いがなくなることにより、自分自身が精神的に楽になるばかりではなく、子どもへのかかわりに変化が生まれたという回答もみられた。

②離婚のデメリット

○子供が友達と「父親」について話ができない。(37歳女性)
○金銭的な事。離婚歴があると言うと勝手に不幸な人間だと思われたり詮索される。仕事の面接に行くときと現在の交際事情などプライベートの事まで深入りされる。(37歳女性)
○しばらくは寂しさがつきまとい、これがまた辛い。(46歳男性)

「父親がいない家庭の不利益や不安」につ

いては、女性からの回答が多い結果となった。ひとり親家庭であると、子どもが小学校の低学年あるいは中学年の時期など、クラスメートから、父親あるいは母親がいないことの理由を聞かれる経験をすることもある。離婚後の親責任としての共同養育、あるいは単独親権制度の是非に関する議論は本稿の趣旨ではないが、日本における離婚後の子どもには、離れて暮らす親からの恩恵が受けられなくなってしまう子どもの不利益を国が制度上容認しているという現実がある。養育費や面会交流など、離婚後の子どもの権利や福祉の担保に関する養育課題は、もはや、喫緊の課題である。

(4) 再婚を考えた理由及び再婚のメリットとデメリット

自由回答記述の一部を示しながら、再婚を考えた理由、そして再婚のメリットとデメリットについて、簡潔に述べてみたい。

①再婚を考えた理由

○私の状況(離婚歴、子どもあり)をすべて理解した上で私と結婚したいと言ってくれたし、金銭感覚やものの考え方がとても似ているのでこの人なら残りの人生を一緒に生きていけると考えたため。(54歳女性、再婚時は50歳)
○離婚後10年以上が経過し、子どももいないので、定年退職まで5年を切ったことで老後が不安になった。ちょうど離婚歴のある中学校の同級生と再会し、特に問題も見当たらなかったため、割りと安易に再婚した。(61歳男性、再婚時は56歳)

自由回答記述にみるように、「良い人と出会った、大切な人と思った、好きになった、優しく思いやりがある、一緒に居ると落ち着くなど」のカテゴリーは女性が最も多かった。男性は「一人の寂しさ、一人の生活のつまらなさ、人生の伴侶と言えるパートナーの希求など」が最上位となった。離婚のメリットに、男性は「自由や気楽さ」を最も多くあげているが、再婚のメリットに上記のカテゴリーが

見られるのは興味深い。再婚を選択する人の心理については上述したとおりであるが、一人の生活が自由で気楽ならば、人との関係をめぐるストレスも少ないように思われるものの、再婚をすることによって、寂しさを埋めるなど、精神的に好影響をもたらすと考えている男性が少なくないという、一見矛盾をする傾向が読み取れるのではないだろうか。また、表18の再婚を考えた理由のカテゴリーの上位から5番目に、「子どもが欲しかった、子どもができた」というカテゴリーがあげられた。男女ともに同数に近いが、子どもができたことが、再婚の動機となるとも言えるだろう。

表17に「経済面など、老後の不安や終活のため」という、現実的なカテゴリーがみられた。これは、孤独感の緩和や生活の保障とも読み取れるが、中年期以降に一人で生活したり、行動するのは周りの目が気になるなど、世間体や居場所感を求めている側面もあるのではないだろうか。

②再婚のメリット

○予期せぬ出来事の遭遇も、互いに補完しつつ精神的に支え支えられる安心感が得られる。(45歳女性、再婚時は43歳)
 ○子供がいたわけではないので、初婚同士と特にかわらないメリットだと思う。(42歳女性、再婚時は33歳)
 ○人生の再スタートができたこと。ただ、前回の反省がいきていないならば苦しみの連続だろうと思います。(55歳男性、再婚時は39歳)
 ○再婚後、子どもが産まれ家族で幸せに暮らしている。メリットしかない。元夫は金遣いが不透明で、ローンや多分借金もあった。元夫の両親も借金があった。今は特別裕福ではないが、身の丈に合った生活をする人で、経済的な心配はない。あの時離婚してよかったと心から思う。(37歳女性、再婚時は31歳)

男女ともに「気持ちや精神面の充実・安定」が最も多かった。3番目に多い「経済面など生活の安定」とも連動するであろう。2つ目に多いカテゴリーとして、「なし、初婚

も再婚も変わらない」という回答があった。やはり、5番目に多かった「離婚経験から得た洞察や学び、自己の客観視」とも関連すると思われるが、これは離婚を経験しているからこそ、結婚の現実を知り、結婚に対して高い理想を求めなくなった結果なのではないかと考える。

③再婚のデメリット

○かならずしも、いいことばかりともいえないとおもいます。配偶者に連れ子などがいる場合、子供たちの教育費などに十分な経済力がないと再婚した生活がうまくいかないかもしれません。経済的な観点から、再婚してもやっていけるのか、本当に慎重に考えるべきだと思います。(55歳男性、再婚時は39歳)
 ○再婚相手に高齢の両親が健在でおり親族が多く気疲れしてしまう。義父母の今後も不安。夫に子どもがいるため、夫が先に亡くなった時に遺産でもめそう。(58歳女性、再婚時は40歳)
 ○初婚の相手には悪いが披露宴を盛大に行うのが躊躇われる。(60歳男性、再婚時は40歳)
 ○夫が初婚で私が再婚だと、夫の家族から離婚の理由やどんな生活をしていたのかなど細かく聞かれることが苦痛。(45歳女性、離婚時は35歳)

男女ともに「なし」という回答が圧倒的に多かった。再婚のメリットとの結果とも合わせて考えると、離婚の経験が生かされているようであれば、特段の不満が再婚には感じられないとも言えるのかもしれない。その一方で、自由回答記述にみるように、子どもの養育をめぐる問題や再婚先の新たな親族との付き合い方など、実際に生活を共にしてみないと分からないような場面に困惑する可能性もあるだろう。

5. 今後の課題

今回の調査では、調査協力者の自由回答記述の分析が中心となった。離婚のみ経験群と

比較した再婚群が再婚を選択するに至るプロセスについては、あくまでも仮説的な知見の提示の域を超えないので、個別的で探索的な研究が蓄積されることによって、より実証的な知見が生成されるだろう。また、統計的検定として χ^2 検定を用いたが、サンプル数が少ないデータもあったので、正確性が十分に担保されたとは言い難い。調査協力者の数を増やして、たとえば、数量化Ⅲ類などの手法を採用することで、より実証的な分析を行う必要もあるだろう。

【付記】

本調査は文部科学省の科学研究費助成事業(研究課題番号: 16K01858)の助成を受けて行った。

【文献及び資料】

Alexy, A. (2020) *Intimate Disconnections: Divorce and the Romance of Independence in Contemporary Japan*. University of Chicago Press. (濱野健(訳), 2022). 離婚の文化人類学—現代日本における〈親密

な〉別れ方. みずず書房).

法務省 (2021) 「協議離婚制度に関する調査研究業務」報告書.

川喜田二郎 (1967) 発想法. 中公新書

厚生労働省 (2022) 「令和4年度 離婚に関する統計の概況」

<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/tokusyu/rikon22/index.html> (2023年9月14日最終閲覧)

厚生労働省 (2023) 「令和4年 (2022) 人口動態統計月報年計 (概数) の概況」

<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai22/dl/gaikyouR4.pdf> (2023年9月14日最終閲覧)

曾山いづみ (2019). Yahoo!知恵袋から考える「離婚」についての支援の現状と課題. 奈良女子大学心理臨床研究, 6, 37-42.

【参考資料】

裁判所司法統計「婚姻関係事件数 申立ての動機別」

https://www.courts.go.jp/app/sihotokei_jp (2021年9月12日最終閲覧)

(のぐち・やすひこ 本学部教授)

(あおき・あきら 大正大学)

(じきはら・やすみつ 富山大学)